

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目：植民地朝鮮における近代的空間としての劇場と演劇界

氏 名：李 知映

本論文は、大日本帝国時代の植民地朝鮮における近代的空間としての劇場に注目する。そしてその中でも、とりわけ朝鮮総督府時代の中 1935 年 12 月 10 日に開館される、京城府の府民のための劇場である「府民館」を取り上げ、府民館が当時の劇団の経営、演劇形式とその内容に与えた影響を明らかにすることを第一の目的とする。さらにこの府民館が、統治権力が日本から米軍政に変わっていく中、韓国国立劇場としてその姿を変えていく過程を考察する。以上を通じて、近代的空間としての劇場が当時の演劇界において如何なる役割と影響を果たしていたのかを明らかにする。本論では、次のように 5 章立ての構成をとって研究を進める。

第 1 章「1900 年代～1930 年代の劇場の実態」では、1900 年代から府民館が設立される 1930 年代までの劇場の実態について考察を行う。ここでは「協律社」^{ヒョニニョルサ}、「圓覺社」^{ウォンガクサ}、「光武臺」^{ゴァムデ}、「朝鮮劇場」^{ジョソンダクザン}の 4 つの劇場を取り上げる。韓国で西洋的な概念における文化空間「劇場」、すなわち屋内型の劇場が存在するようになるのは、20 世紀初頭のことである。韓国の公演様式が、そもそも祝祭的な演劇の伝統を受け継いでおり、神と人間、そして自然の調和の中で成り立つものであり、即興性が強調され、舞台機構の助けなしに上演を行っていたため、室内の上演空間は必要とされていなかった。しかし、屋内型の劇場の登場により、これまで野外で行われていた公演芸術が、狭く閉鎖された空間に押し込められるようになる。その結果、公演芸術は、大きく二つに区分されていく。上

演形式として、劇場の中での上演が可能なものと、そうではないものに区分される。さらには、劇場での上演が不可能なものを可能にするため、形式を変えることも行われた。このような屋内型の劇場の登場は、演劇形式のみならず演劇内容においても変化をもたらすこととなる。以前までは観劇者の身分の違いにより見るものが区別されていたが、限定された室内空間の中で共に観劇することにより、内容がある程度制限されるようになった。また、集中力を高く維持できる室内空間の性質を活かし、演劇美学と舞台技術が発展していくのであった。

第2章「『府民館』の誕生」では、府民館設立に至るまでの背景と、建物の設備及び運営方法について調査する。また、府民館周辺の状況も視野に入れるため、同時代に建てられた劇場も合わせて考察を行う。当時の演劇界においては、劇場は制作された作品を発表する場所という単なる空間概念ではなく、舞台制作そのものを行う中核的で不可欠な存在として認識されていたが、植民地支配下においてはそれを実現する状況にはなかった。こうした状況を背景に、1935年12月10日、当時これまでにない規模の施設を持った近代的文化施設である府民館が開館した。建物の各階は地下1階、地上3階で、大講堂、中講堂、小講堂など様々な付帯施設があり、複合的文化空間としては朝鮮内で最も充実した施設であった。また、京城の中心部に次々と劇場が建てられるようになる。「東洋劇場」^{ドンヤングクザン}、「團成社」^{ダンソンサ}、「明治座」^{ミョンチザ}、「黄金座」^{ハングムザ}、「若草劇場」^{ヤッコククザン}等がそれである。東洋劇場は、演劇専用劇場として演劇の専属団体を設けており、外部の劇団の公演のために開放されることは滅多になかった。また、明治座をはじめとするその他の劇場は、日本人の所有である上に、映画の上演が主な目的であったため、演劇団体の使用には不都合が多かった。しかしそれらの劇場に対し、府民館は貸し出しを運営の基本方針としていたため、多数の劇団をはじめとする舞台芸術団体による様々な公演が行なわれたことが明らかになった。

第3章「『府民館』を通じた新たな試み」では、1935年から1939年まで府民館で行われていた演劇活動について、とりわけ「劇藝術研究會」^{グゲスルヨングヘ}（以下、劇研）^{ジュンアンムデ}、「中央舞臺」^{コヒョブ}と「高協」という3つの劇団を取り上げ、そこで行なわれた新たな試みについて考察を行う。さらに、商業劇の新しい流れとして登場する「楽劇」という演劇ジャンルも取り上げ、府民館との関係についても考察する。劇研は日本で海外文学などを学んできた留学経験者が中心となって組織された劇団である。演出家洪海星^{ホンヘソン}と柳致眞^{ユチジン}の二人が中心となって、演劇を通じて民族の教化を目指す公演を主に行っており、この劇団は、かつては知識人や学生といった一部の観客だけに受け入れられていた。しかし、そのことに対する反省もあって、劇研の代表柳致眞は観客中心の演劇という「観衆本位論」を主張するようになる。さらに柳致眞は、大劇場に適合する「上演様式と劇作技法としての浪漫主義」を提唱し、こうした実験と模索を通して、歴史劇と唱劇などの伝統的な演劇形式を府民館で試みる。このような劇研の活動に刺激を受けた劇団「中央舞臺」^{ジュンアンムデ}と劇団「高協」^{コヒョブ}は、それまでの大衆性が高い商業劇のスタイルではなく、大衆性と芸術性のバランスが

とれた舞台創造を目指し、「中間劇」という新しい演劇ジャンルを提唱するようになる。また、公演上演中、幕と幕の間に行なわれた「幕間劇」というものがあったが、府民館で上演された日本の劇団「宝塚」の公演から演技や舞台構成等の刺激を受け、大きな公演空間を積極的に受容することとなり、一つの新たな演劇ジャンル「楽劇」を創設させた。

第4章「演劇統制政策と『国民演劇』」では、植民地朝鮮における演劇統制政策と、1940年前半期に行なわれた「国民演劇」に関する考察を行なう。演劇統制政策は、初期の劇場における衛生と風俗に関する取締りに続き、公演を行う前になされる「事前検閲」と公演中になされる「公演検閲」、さらに思想統制の一環として「脚本の検閲」が行われるようになった。そして1940年に入ると、「国民総力朝鮮連盟」の文化部傘下の「朝鮮演劇協会」により、国家が直接個人を指導、統制する方法へと、その政策の方針が転換されたことが分かった。日本政府が太平洋戦争に向けた「新体制」構築のもと国策を宣伝・扇動する手段として芸術を積極的に利用するようになるが、この時期に上演されていた演劇のことを「国民演劇」と言う。この動きは、国民演劇の理論樹立とその実践化に一層拍車をかけ、劇団「現代劇場」^{ヒョンデグクザン}と劇団付設である「国民演劇研究所」を設立させた。「朝鮮演劇協会」に加入してないと活動が出来なくなることや国民演劇しか上演できない等の国家による直接管理、指導という演劇統制策を、当時の演劇人は一種の支援政策としても受け取っていた可能性はなくはない。実際に「朝鮮演劇文化協会」の主要事業であった移動演劇隊及び国民演劇競演大会などを通じて、従来では得ることが出来なかった演劇界に対する国家次元での支援がみられる。このように、当局の強い圧力と懐柔、そして演劇人の内的要求の結果として「国民演劇」は展開される。植民地時代の演劇統制政策と1940年代前半期の「国民演劇」という二つの要素が別々に進行していたのではなく、一つの目的の下で動いたことが分かった。

第5章「植民地時代の産物の『府民館』^{フミンゴファン}から韓国『国立劇場』へ」では、朝鮮における統治権力が日本から米軍政に変わった1945年8月15日から1948年8月15日までの約3年間の「米軍政期」における文化政策と時代状況、その中で推進されていく韓国国立劇場の設立の経緯と過程について考察を行う。米軍政の占領初期は、全般的な占領目的の下で文化の問題が扱われていた。すなわち、文化政策の独自の問題設定や展開がなされたのではなく、米国の対外政策・戦略と米軍政の占領政策という限定的目的で行われていたことが分かった。占領後期になると、反ソ反共^{反ソ反共}に依拠した左翼運動に対する強い弾圧と、米国文化普及のための宣伝活動により力を入れることとなった。結論としては、米軍政の文化政策は米国の政治・軍事的利益を擁護するため、企画・管理されたといえる。このような状況の中、韓国国立劇場が構想されることになり、実際に設立されるのは、大韓民国政府樹立（1948年8月）後の、1950年4月29日である。1949年末の米軍撤収に伴い、当時米軍の娯楽場として使われていた府民

館が国立劇場として開館する。かつて活発な演劇活動を府民館で行なっていた当時の演劇人は、府民館が国立劇場として指定されることを希望していたので、この決定は願ってもないことであった。しかし、この国立劇場の設立においては、芸術を政治的に利用しようとする大韓民国政府の意図が含まれていたことが分かることになる。すなわち、国立劇場の運営を、芸術家たちの要求だけではなく国策の意図を効果的に伝えるための、国民を教化する場として活用する意図があったのである。そのことは演劇人たちの闘いが続いていくことを意味している。

以上のような考察を通じて、植民地朝鮮における近代的空間としての劇場の誕生こそが、劇場の境界を行き来しながら、劇団、演劇形式、演劇運動、そして文化政策に、新しい変化を呼び起こしたことは明らかである。特に、1930年代中盤以降の演劇界においては、府民館での演劇活動を通じて素材の発見、ジャンルの多様化が試みられており、それらがさらに演劇界を豊かにしたことは間違いない。そして府民館は、1940年以降国策によって制限された作品しか上演できない空間へとその性格を変えるものの、依然として積極的な演劇活動を展開していた演劇人たちにより、大韓民国政府樹立後の国立劇場の設立が導かれたのである。府民館において行なわれた演劇活動が、韓国演劇に多大な貢献をしたことが明らかになった。